



月刊 第 587 号

沖は漁火 膳はイカ盡し

観音講が雨を待っている。ど
うしてもこの時期梅雨入りと
なつて雨に崇られ勝なのである
が今年ばっかしゃどうなつてい
るのか、雨を待っているのは観
音講じゃのうて山の島ですてば
ね。どこでもこんな会話が交さ
れている。折角植えたナスも
キユウリもしこたま強いカボ
チャまで干乾びて、ジャガイモ
掘ってみればひねこびて皮が固
いとが。稲も用水の水は充分入

るものやはり天からの水と違
い仲々丈が伸びない、この分だ
と又平成六年みたいに米騒動が
起きなければいいがとそんな話
題まで飛び出す状況である。
勿論観音講はよいお天気恵
まれてカミシモから善男善女が
参詣、今年是新築された木の香
も新しい庫裡、入口からの石段
もスロープになり整備された境
内はいつまでも賑わっていた。
私も植木屋さんでバラを二本
求めて地に下ろしたものの毎日
水くめで大変だが、割と高値な
品だったので何とか枯らさず根
付かせたいものと朝夕せつせと
世話している。

漁師さんは雨はいらんろも一
寸異常でその分しつべ返しが来
なけりやいいがとこちらもいざ
となれば天候に左右される仕事
だけに手放して喜んでばかりも
いられない様子。
就航した高速船は好天の中順
調に三便の往復、特に朝の第一
便はミニ観光のセット料金で販
わつていて。六、七月は一年中
で一番の風の季節、ほとんど波
のない初夏の航海は快適で毎日
数台の観光バスが運行され、評
判も仲々、値段が値段だけに登
食はどんなもんかと思つていた
ら結構な物が出されていや！満
足、よかつたいねとの感想。
振り返ってみれば昭和四十八
年六月からカーフェリーのさど
丸が就航初年度は八月までの季
節運航で四十九年からは四月か

ら九月までの半年運航となり平
成元年から通年運航が開始され
平成四年には新しくえつさ丸が
就航、今年六月までと言うカー
フェリー時代があつたわけで乗
客もさることながら貨物運送で
も仲々の活躍をしていたわけ
で、特に高内の道路状況から赤
泊小木方面いわゆる南佐渡関係
の貨物は新潟方面から寺泊へ運
送してコンテナや長大な品はナ
ンバーなしのトラックに積み替
えてそのままフェリーで港から
港まで運ぶと言う型で活用、佐
渡からの魚も寺泊へ積み出しさ
れていたようである。
終航のえつさ丸を海側の部屋
から見送つたのだが最後の汽笛
はやはり物悲しく辛い思いで聞



中央埠頭出遇いの広場のシンボルに新顔参上。
短歌の馬場あき子、宮 英子、俳句の中原道夫三氏の文
学碑。



蜃の光の曲に送られて終航の船出。
これが最後の別れかと思うとなつかしさがこみあげる。
この日の夕日ははやけていた。



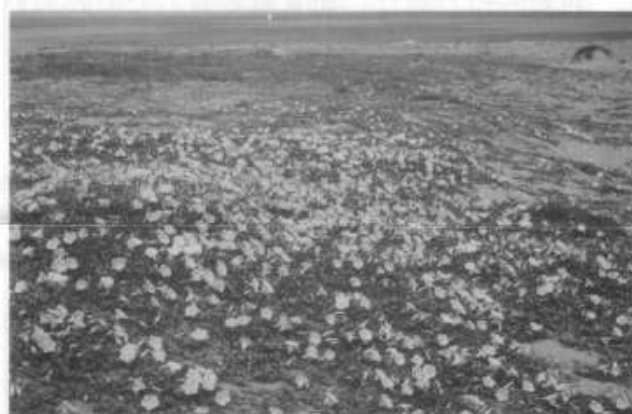
別れがあれば出遇いがある。
カーフェリーに代って登場の高速船「あいびす」、ラテ
ン語で「朱鷺」。佐渡まで1時間。初航海の雄姿。



あまり知られていない寺泊の夜景である。
夜釣の遊漁船が帰港するのは11時半過ぎ。
5、6船が一勢点灯すると裏山まで明るくなる。



町の花であるはまなすが見頃である。
赤、ピンク、白の三色が見事に咲きそろっている。
町の樹のニセアカシヤは今年は元気がない。



砂浜一面に咲き広がる浜ひるがお。
浜えんどうの群生も見事なので観演させようと思ってい
たら、咲き終わってしまった。

いた。
今夜も沖は漁火が連らなつて
いる。日没が遅いので六時半に
出航する遊漁船はまだ明るい中
で点灯、夕闇が濃くなるにつれ
輝きを増してゆく。今はイカ釣
りの季節仲々連日大漁の様子で
ある。特に十二時近く帰港の船
が接岸後満灯に点灯すると港は
一面まばゆいばかりに輝きわ
たつて境内の松が昼間とは趣き
を異にして美しい緑色に映え
る。

にも適していて、寿司によし天
ぶらによし、近頃は塩辛と言う
が寺泊では「切込み」と言つて
いた。左党には欠かせぬ一品で
ある。最近ではバスタ流行でしか
もイカ墨などと言う代物が珍重
されているようだが私は一寸頂
きかねる。先日イカの安売りで
作り過ぎてとイカチマキを頂い
た。名物イカ墨し膳など如何。

小説「寺泊」

さとうのぶひと

先月号の抽記事で「江東区」
とある二カ所は「台東区」の誤
りです。お詫びし訂正いたしま
す。また隅田川、吾妻橋たもと
のビル屋上にあるオブジェを聞
うたところ、さつそく誌友より
回答をいただきました。ありが
とうがございました。本誌が大勢
の誌友に支えられていることを
改めて感じ、身の引き締まる思
いがいたしました。

地名をタイトルにした水上の
短編に「墨染」があります。京
都伏見の地名です。その中で「墨
染」という名も、どこやら粹な語
感があつて」と言つており、「て
らどまり」というちよつと発音
しづらい語感も、水上には粹に
映つたのかも知れません。

人は自分の名前を呼ばれた
時、機械的に反応するよう飼
慣らされておられ、格別それに意
味を求めようとはいたしません
。自分を識別する記号に過ぎ
ないからです。しかし自分以外
の者は、その名前に意味を求め
ます。墨染と寺泊。この二つの
言葉はいずれも、水上の禅寺で
過ごした少年時代に通底してい
ます。水上にとつて「てらどま
り」は意味のある言葉だったに
相違ありません。
とここで、寺泊に住む人と
つて、この小説「寺泊」はあま
り評判がよくないのです。いわ
く「いくら何でも暗すぎる」と。
たとえ三十年近く前の話にせ
よ、反発を感じる寺泊の人が多
くいます。三十年前の寺泊を記
憶されている誌友もたくさんお
いでしよう。ともかく、作家
は檻の外から寺泊を見ていて。
檻の中は、荒れた雪の日のう
らぶれた漁師町。男を背負つて
カニ場へ急ぐ女。貪るようにカ
ニを食う餓鬼道に墜ちた寺泊の
人々。たったこれだけのことに
過ぎません。ところが水上の手
にかかると、冬の越後の海岸が、

驚くほど叙情性の高い私小説になつてしまふのです。寺泊の説者に「暗すぎる」という感想を抱かせた小説『寺泊』は、それだけでも大成功だったと言えるでしょう。

水上勉は、松本清張の「一点と線」に発憤興起し、59年『霧と影』を書いて、いきなり推理作家の仲間入りを果たしました。名作『飢餓海峡』に代表される推理小説を次々に発表。以来、清張とともに社会派ミステリーの旗手というイメージだけが大きく先行してきました。しかし、水上が推理作家であった時代はほんの五年ほどと言われ、そう長くはありませんでした。その後、水上は心境小説、私

小説作家に転向し、一方では「一休」や「良寛」などの評伝を書き、エッセイ、紀行文など間口の広い文筆家として活躍しました。小説『寺泊』は水上の私小説作品の最高傑作と言われ、その位置を不動のものにしています。原稿用紙二十枚程度の短編に、はち切れんばかりの叙情性を詰め込んで。その冒頭です。「よこしなごの雪が寺泊の海岸へ降りかかる。海はよこれた灰いろで、高波は砂丘の砂をけずるせいか、褐色の長い布を吹きあげるみたいに空へ高まる。かと思うと、すぐうねりを低めて岸へ近づいてくる」

いです。冬。冬の濁った硬質な海が、仮名の柔らかなさと調和しています。感心させられたのは「褐色の長い布を吹きあげるみたい」という表現です。ひらひらする布のイメージを波のうねりに重ねるとは、絶妙な書き出しです。作家の分身である「ぼく」は、寺泊が目的でタクシーを降りたのではありません。降り積む雪のたためたいや・チェーンの必要を感じた運転手が、それを買に行った間、仕方なく待たされただけで、クルマを降りたというよりは、降らされたのです。「それにしても、なんと荒涼たる町か。海岸通りは、船小舎と製材所と給油所が表へ出ている

が、あいだに、とびとびに、人家とも倉庫ともつかぬトタン屋根のひしゃげた平屋が、雪開いの茅の束をふるわせているばかりで、人影はないのだった」三十年前の寺泊を知っておられる方なら、「ぼく」がどこに立っていたか、ほぼ予測がつくでしょう。しかし、これほどひどくはなかつたはず。この貧しさ、暗さはいかにも水上好みの描写と言えます。(つづく)

東京都	指田千沙子	金三千元
新潟市	小田野 正	金三千元
野沢 英雄	金三千元	
佐野 キク	金五千元	
石崎 啓資	金五千元	
長岡市	松山 エイ	金三千元
住川 健	金三千元	
石塚 力	金三千元	
燕市	清水 屋	金五千元
弥彦村	本合 電	金三千元
寺泊町	石原 敏	金三千元
外山 健	金五千元	
星 敏	金三千元	
竹内 文男	金三千元	
外山 四郎	金三千元	
竹内仁 一郎	金三千元	
野沢 操	金三千元	
大宮 正和	金五千元	
白井 一男	金三千元	

誌代御後援(敬称略・順不同)
大和市 前田 昭 金三千元
茨城 星 武彦 金五千元
習志野市 徳久 裕 金一万元
松戸市 摩庭 ハナ 金三千元
横須賀市 後明 宏美 金五千元



恒例の照明寺観音講は6月16日から18日まで厳修され善男善女が参詣。
今年は木の香も新しいお庫裏をバックに。



町では時々こんなパーティが催される。
うまい物を食べて、うまい酒を飲んで、大いに歓談しようと言う訳。即海辺の取巻祭。



何の変哲もないただの石臼。なる程周りに矢車草が咲いてそれで？ 誌友から電話があって行って見たら穴の中に5羽も小鳥のヒナがいたのです。

小波会六月旬会詠草

兼題 夏の海・汗他当季

あいびすの

初就航や夏の海

小島 冬扇

夏波や

小舟一搜遊ばせて

江原 汀子

嬌声の

ヨットの傾く夏の海

外山 海子

夏海の

静まる渚夕映えり

外山きよし

青春の

憧れ遠く夏の海

中村 流瓢



第四区郷本地区欠場のままの町民運動会であったが、やればやったで結構な盛り上り。
こんな和気あいあいの風景いつまでつづくのか。

鉢植えの

並ぶ路地裏夏の海

大越碧水子

ハウス内

寒冷紗張る汗しとど

小島 温石

番屋汁

振る舞う若衆玉の汗

加勢 白汀

豆紋り

ほどいて拭ふ玉の汗

内藤 蓮子

あじさみの

珠のひしめき雨の寺

小形 美代

姉卒寿

見せたき夏の大人日

能登 頑牛



いざ決戦の時至ればみんな真剣になりますわ。
応援団もつい飛び出して大きな声援。

今生に

別れの叔母も更衣

水沢 蕉子

蛇何処へ

古株の穴顔を出す

竹内 霍山

あとがき

中央埠頭の海と陸路と人との出遇いの広場に黒い御影石の文
学碑(写真参照)がある。

新潟日報の俳句と短歌の選者
で「観光に文学を」の呼びかけ
に応じて町で旬会、短歌会を指
導して下さった俳人の中原道夫
さんの
寺泊より
蟹売りの来るころか
宮英子さんの

寺泊の日本海にあこがれて

梅雨しとどなる岩壁に立つ

馬場あき子さんの

あか魚も青うをもめて寺泊

いろいろの宮の香りみちた里

と言う作品が刻まれている。

広々とした日本海をバックに

海風のメロディの塔がぼつんと

立ちその傍にこの碑が初夏の陽

射しを一杯に受けて輝いている。

日が傾くと二つの影が長く伸び

て重なったりもする。山手には

丘陵が延びて今は丁度若葉色か

ら夏の濃い緑に移り変わる季節で

一番緑の美しい時であろうか。

その緑の中に寺の屋根が点在し

社の屋根が見えかくれする。

朝夕その緑の中のとこからと

もなく鐘の音が響いて時を告げ



かつては手作り弁当を広げてご馳走を交換し合ったり、
酒を酌み交したりと一日のんびり過したもので、福らぬ
あの日ですか。

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興 樹

発行人 新潟県寺泊町

発行所 ふるさとだより

郵便番号 九四〇二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九番

振替番号 〇六〇三三三二七四五

印刷所 吉野印刷株式会社

毎月二十日発行